

Title	ハイマン・カブリン編著 明治労働運動史の一齣：高野房太郎の生涯と思想
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.1 (1960. 1) ,p.94(94)- 99(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19600101-0094
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600101-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハイマン・カブリン編著

『明治労働運動史の一齣』

—高野房太郎の生涯と思想—

日本の社会運動史や社会思想史上の人物で、その果たした役割がきわめて偉大であり、その足跡は没すべからざるほどのものでありながら、われわれ日本人にとってともすれば忘れられがちとなり、あるいはほとんど無視されてきた場合も少なくない。にもかかわらず、外国人によってとりあげられ、新しい評価をうけるに至ったという事例は、しばしば見られるところである。たとえば、江戸時代の秋田が生んだ革命的な思想家安藤昌益に注目し、これを世界史的視野のもとに再評価しようとしたすぐれた資料的研究によって、昌益の名をわれわれに親しみ深いものにしてくれた者は、かのスエズ動乱の渦中に、惜しくも悲劇的な死をとげたE・H・ノーマンであった。この意味において、ハイマン・カブリン氏が昌益が「忘れられた思想家」であったと同様に、「忘れられた労働組合運動の指導者」であった高野房太郎にかんする研究をなしたことは、まさに注目すべきものがある。

本書の冒頭には高野房太郎およびその家族の写真がかかげられ、その口絵写真解説は、早稲田大学の入交好脩教授によってなされている。また同教授による「あとがき——上梓に至るまでの経緯について」によれば、著者ハイマン・カブリン (Hyman Kublin) 博士は、ブルックリン大学歴史学部教授として、日本の近代史とくに労働運動史を専攻する少壮学者であり、一九一九年生まれ、一九四九年ハーヴァード大学出身であるから、今年四〇歳という若さである。一九五五年、フルブライト研究教授団の一員として来日し、早稲田大学において、日本の労働運動史について研究をつづけ、高野房太郎をはじめ、幸徳秋水や片山潜などについてもいくつかの論文を発表している。

日本の労働運動の指導者のうちで、何故に高野房太郎をとりあげたか、その理由については、著者カブリンは、その序文においてつぎのように云う。「この書物の主題としてなぜ高野房太郎と彼の著述をえらんだかについてはいくつもの理由がある。第一の、また最も重要な理由は、筆者が、日本の労働運動の真の創始者があるとすれば、それは高野房太郎であった、と信じているからである。日清戦争直後の数年間において、労働組合運動を起そうという企てが行なわれたとき、日本の労働者を組織する活動に指導と支持を与えようと努力した開明的な善意の人々が何人か存在した。しかし多くの場合、これらの人々はたかだか知識階級の社会改良家であって、それが労働組合の問題にいささか手を染めたにすぎなかった。日本のも

がふくまれている。

高野房太郎は、明治元年、長崎において、高野仙吉の長男として生まれた。彼が十歳になったとき、一家は東京にうつり一八八〇年に父は死亡し、高野家は非常に苦しい試練に遭遇した。房太郎は小学校を終えると横浜にうつり、そこでは伯父の店で働き、また横浜商業学校に通った。一八八五年には伯父がなくなり、翌年高野は日本を去ってアメリカに渡った。アメリカでの彼の生活については、著者によれば、「結局はニューヨーク市に移ったという以外、ほとんど何も判っていない」のだが、アメリカ労働総同盟 (A. F. L.) の創立者サミュエル・ゴンパース (Samuel Gompers) の影響をうけ、城常太郎、沢田半之助およびサンフランシスコ在住の日本人労働者の他の数名と一緒に、一八九〇年(明治二三年)職工義勇会と呼ばれる小さな研究団体を組織した。

当時のアメリカ合衆国は、イギリスにつき、ドイツと並んで世界におけるもっとも進んだ資本主義国のひとつであったが、そこでの強固な労働者の組織を目標とした後進国の一青年高野は、おくれた日本の資本主義と未成熟な労働者の階級意識について痛感させられたにちがいない。一八九六年、十年にわたるアメリカ滞在ののち、日本へ帰ってきたのだが、彼はどのような思想を抱いていたのであるか。著者はつぎのようにいう。「高野は、社会的・経済的の制度としての資本主義に対する反対者ではなかった。先進的な資本主義社会の機能ぶりを眼のあたり眺め、その利点も欠点も知りながら、し

つ特殊な要求や諸条件に合わせて、労働組合運動を促進することにすべての努力を捧げた者は、ほとんど高野ひとりであった。」また大河内一男教授も、本書に取められている論文「労働運動史上における高野房太郎」のなかで、つぎのように書いておられるのは、カブリン博士の研究の重要性を正しく指摘しているといえよう。

「……その意味で高野房太郎は、全く忘れられた社会運動家だといえる。黎明期における日本の労働組合運動の指導者として、高野とともに活躍した片山潜が、日本においてはもちろん、国際的にも高い地位を与えられているのに対して、或る意味では片山より以上に労働組合を愛し労働組合主義に徹していた高野が、短期間の精力的活動の後、忽然として、労働運動の舞台から身を退き、その足跡をくらましてしまったばかりでなく、それとともに極く短い活躍期に彼が日本の労働組合に与えた足跡をもくらましてしまい、後年ひきしく、日本労働運動史上、片山を語って高野を語るものがないのは、単に歴史の不公平であるばかりでなく、また、日本の労働運動史を正しく理解しようとする途でもないだろう。その意味では、ここに漸く、カブリン博士の蒐集になる高野房太郎の論文集が日本で刊行されたことは、而もそれがあたかも片山誕生百年にあたる同じ年に刊行されたことは、意味深いことである。」

本書は、前記大河内教授の論文につづいて、著者カブリンの高野房太郎——労働運動指導者の生涯と思想——、高野房太郎年譜、高野房太郎文集から成り、文集には、和文十教篇、英文篇二十教篇

かもなお人類の福祉増進のために資本主義が果し得る寄与とその可能性を信頼していたので、彼は、資本主義を撃滅するために努力するよりは、それをもっと報いの豊かな能率的な社会にすることを望んだのであった。こうして彼は、資本家には激しい非難を浴せながら、それと同時に資本主義制度はこれを弁護した(二七頁)。著者はさらに「高野が理想家ではあっても決して夢想家ではなく、感受性は豊かでも決して激情家ではなかったし、複雑な社会および経済の諸問題というものは、単純な教義的な公式の適用によって解決されるべくもないと信じていた」ことを指摘し、「ゴンベースに似て本質的には実用主義であった」と主張する。

それゆえ彼はもとより社会主義ではなかったし、いわんや共産主義者ではなかった。明治二四年八月七日、読売新聞に社説として掲載された高野の論稿「日本に於ける労働問題」のなかでつぎのように云う。「然り労働者を救済するは実に今日にあり、日本労働者の不平の念未だ破裂せざる今日に於て立たざるべからず。彼等は今其の辛苦を忍び居れり。其の破裂するの時は共産党の日本に顕はるるの時なり、急進社会党の日本社会に勃興するのときなり。共産党、急進社会党、日本国民の好む所ならんや、然れどもその未だ破裂せざる今日に於て之を導かざるに於ては、共産党の起り、急進社会党の現わるる蓋し自然の勢なりと謂はざるべからず」(本書九〇頁、但し傍点筆者)。

高野が日本の労働界にその姿をあらわしたときは、日清戦争中

態を改良するの至難なるを思ふ。実に大至難なり。故に極めて強大なる勢力を要す。強大なる勢力をもって徳義的に実利的に秩序あり識見あるの運動を要するなり。徳義的に運動して以て不正なる社会の組織を破らん事を要す、不当なる資本家の压制を矯正せん事を要す、労働者の地位を先進し其権利を拡張せん事を要す、労働者の不徳軽薄を匡正して謹厚篤実の風を起さしめん事を要す、実利的に運動して以て労働者の生活教育の度を進めん事を要す、労働者をして資本家と経済上同一の地位を得せしめん事を要す。然らば如何にして此強大なる勢力を得、此秩序ある識見あるの運動を為す事を得るか。他なし唯結合の一法あるのみ、協同、一致の作用あるのみ。結合は以て強大なる勢力を造り出すことを得、協同、一致は以て秩序あり識見あるの運動を為す事を得、是れ実に日本労働者が其の状態を改良する唯一の方法に外ならず……」(読売新聞、明治二四・八・八、第五〇八五号、本書九一頁以下但し傍点筆者)。

高野は労働者を団結せしめてひとつの強固ならしめるためには、日本の労働者の場合、どのような方法によるべきかまたどのような条件が必要であるかという点については、つぎの文章はまことに興味深い。

「然れども彼等労働者は無産なり無家なり、如何んぞ秩序あり識見あるの運動を為すことを得んや。彼等は今実に其卑屈の地位に甘んじ居るの観あり、然れども彼等の胸中には必ずや尚多少其状態を痛歎するの意志を有す。此意志は近く嘗て発して靴工の結合を形造

から戦後にかけての日本資本主義の確立期——産業革命の過程であった。近代的な紡績工場をはじめとして機械化された工場の出現によって、古い封建的な主従関係は次第に破壊されたけれども、それと反対に、一方においてあまりにも低い賃金と長時間労働、児童労働、ブラック・リストなどに苦しめられる労働者、しかも他方無智と無自覚、貧困と頹廢のなかにおかれていた労働者のみじめな状態を眼のあたり見て、彼がこれらの労働者を団結させ組織させる必要を感じたことは疑いない。かくして明治三〇年「職工諸君に寄す」という文書が発表されたのであるが、その起草者が、城であるか沢田であるかあるいは高野であるかは明らかではない。カプリンは高野ではないかといっているが(本書三五—三六頁)、その内容は、労働者階級にたいする同情と激励、その団結の必要性を強く訴えたものであった。これが、その内容の稚劣にもかかわらず、日本労働運動史上記念すべき歴史的な文書と考えられる所以は、それを読むことによってわれわれは、今もなお日本における労働問題の発生を、この資本主義確立期の苦悶の生々しさを感ぜしめるからにはかならない。

だが高野が、労働者の生活条件の改善のために団結の必要性を訴えたことは疑いないとしても、そこにまた彼の独自の思想が芽生えていたことは興味深い。すなわち、つぎのようである。「故に今日に於て日本労働者の惨状を救済せんとするに於ては、其根底の原因より全く除去去らん事を要す。余輩ここに至って日本労働者の状

りたり、此意志は近く発して石工の同盟罷工をなせり……。実に労働者等は此意志を有す。此意志こそは其結合の礎石とすべき者にして、結合の端緒以て開くを得べし。之を開かんが為めには一つの重要な作用を要す、何ぞや、有識者をして率先之が導火たらしむる事是なり。惟、前に彼の英雄崇拜の気風は日本民族特有の特質にして、殊に労働者に於て此風習の堅固なるを見る。彼の師弟の關係の如き実に此の風習を起したる一因たり。英雄崇拜風の労働者間に盛なる、利して以て結合の成立を全うすることを得べし。有識者が率先して結合を謀らんか、彼等労働者を喜んで此率先者の指揮に従わん。彼等が英雄崇拜の気風は、彼等の不徳の行為を停限し、猜忌嫉妬の念をして盛んならしめず、以て結合を全うすることを得べし。彼等は無産なり、然れども有識家の指揮の下に運動す、結合の勢力以て容易に為し得べきなり……」(読売新聞、明治二四・八・九、第五〇八六号但し傍点筆者)。

労働者は無智蒙昧ではあるが日本民族特有の英雄崇拜の気風を利用して、有識の指導者が彼らを組織し団結せしめることの必要性を力説している点は、労働運動の日本の特質にたいする彼の洞察力の鋭さを示すものではあるが、同時に、労働者の自覚をうながすよりは、知識階級の善意に訴えたという点で、その思想は多分に空想的な色彩をおびていたといえるのではないだろうか。その証拠として、つぎの一節は味わうべきものを秘めている。「熟ら欧米各国に於ける資本家労働者間の關係の近状を察するに、資本家の結合が

労働者の結合を制裁し労働者の地位を益々困難ならしむるを見る。労働者が依て以て其権利を保全する唯一の手段となせし同盟罷工及びボイコットは、今や資本家の有力なる結合に対して其効力を全うすることを得ず、却て資本家の為の同盟停業、職工総解雇の窮迫に遇へり、是れ近時に於ける一現象にして、労働者結合の前途一大困難を現はし来れり。吾人は、此の如き現象の日本労働者の頭上に落ち来ることを望まず、故に今日に於て勉めて識見あり秩序ある運動を為して、以て将来此の如き不吉の結果を来さざらんことを望まざるべからず」(同上、本書九三―九四頁但し傍点筆者)。

けだしこれによれば、高野は労働者の団結が絶対必要であることは、これを認めながら、しかし資本家の圧迫と労働組合の力との対立が激化して、その結果、ストライキが勃発し労働組合が敗北するような不祥な事態がおこるならば、労働者にとってまことに不幸であるから、有識者がこれを指導することによって、このようなことは避けるようにしなければならぬという一見きわめて矛盾した考えが、併存しているように見える。だが、更に進んでつぎのような一節を読むならば、必ずしもそうではないことがわかる。「労働者をして直接的利益を享有せしめんとせば、先づ此会合をして友愛協会たらしめんことを要す。即ち其会員の疾病に罹るや之れを救助するの資金を与へ、其の死亡するや其家族に扶助金を給与し、其火災其の他の不幸に遭遇するや之を援助するの仕組を設く、これ其の一方なり。労働者の貯金を集めて共同営業会社を設け、労働者をして

資本家の地位を兼ねしめ、生産上分配上労働者をして其利益を享有せしむるにあり、或は物品の製造に従事し、或は日用必需品の売捌に従事し、以て労働者の収入を増し、若しくは其生計費を減せしむ、是れ其二なり。第一の方法は事の易なる者にして、労働者の結合成ると共に之を奉行することを得。然れども第二の法に至りては日本労働者の現状之れを許さず、故に専ら財産家の協賛を得んことを謀らざるべからず。財産家の協賛は吾人の熱望する所なり……」(前掲読売新聞八・一〇、第五〇八七号、本書九四―九五頁、但し傍点筆者)。

高野の労働組合の理論の中核をなすものは、友愛組合的信念であり、さらに労資協調的思想であった。ここに彼が明治三十三年以後、忽焉としてその姿を労働界から消したもとも大きな原因のひとつが見られるのではないだろうか。労働組合期成会は、彼の思想を具体化した労働者の啓蒙機関であった。そしてやがて鉄工組合、日鉄矯正会の勝利などによって労働組合運動が活潑となりつつあったにもかかわらず、一方における組合内部の問題――分権主義・セクト主義――他方における官憲の圧迫によって、早くも一九〇〇年――治安警察法の年――には、日本労働組合運動はひとつの大きな危機――歴史的な転換期――に直面した。これについてカプリン博士はつぎのようにいう。「治安警察法は、むしろ日本資本主義の弱さの表現であり、また日本の国家の専制的性格――それは労働運動ばかりでなく資本主義をも同じく歪めたのであるが――を端的に示すも

のであった。……労働運動にたいして国家が打撃を加えたことは、

高野にとって粉砕的な効果をもった。彼は闘士ではあったが、彼にとって殉教者になることは無意味であった。将来の闘いも無益と考えると、彼は労働界から完全に退いた。その後間もなく、高野は北支那に渡り、続く数年の間は、「ヨコハマ・アドヴァタイザー」紙の通信員として北支那各地を遍歴した。一九〇四年三月十三日、彼は肝臓腫のため青島のドイツ人病院で三十六年の生涯を了した」(五二頁)。

高野房太郎は、草創期の労働組合主義の指導者にふさわしい実践的才能の持主であり、社会改革者であった。その思想的・イデオロギー的限界はともかく、今日、片山潜や幸徳秋水をはじめ多くの先駆者たちの伝記や研究が續々と現われつつあるとき、それほどはなばなしい存在ではなく、むしろじみきな性格のために、忘れ去られようとしていた高野にかんする研究と新しい資料紹介とが、彼が日本のつぎにもっとも愛着を覚えたであろうアメリカ、そのアメリカの学究の手によってなされたことを心から喜ぶものである。(昭和三十四年七月、有斐閣、七〇〇円)

(飯田 鼎)

A・B・コール

「日本中小企業の政治動向」

—A. B. Cole, Political Tendencies of Japanese in Small Enterprises, with special reference to the Social Democratic Party. Institute of Pacific Relations, N.Y., 1939. 155pp.—

わが国の中小企業の問題性は、ほかの諸国に例をみないほどに深刻なものであり、中小企業問題ではわが国は先進国である、などと冗言される。たしかにわが国の中小企業群の存在の膨大さ、とくに零細経営の多いこと、しかもそれらの状態がきわめて劣悪なことは他の先進国では夢想だにできない事実であろう。このわが国の特殊性に注目するあまり、中小企業問題をわが国にのみ特有な問題・現象であるとする把握がかつては一般的でさえあった。しかし、その深刻さの程度や現象形態・問題の所在は、それぞれの国の社会経済的諸条件や資本主義発展の歴史的性格のちがいに異なり異同はあっても、総じて独占資本主義段階に共通してみられる問題・現象として中小企業問題の本質は把握されるに至っている。

わが国におけるこの問題の研究の系譜をみると、少なくとも客観的にこの問題の本質把握を志向する研究の主流は、多くマルクス経済学の立場にたち、問題を独占資本による劣弱中小資本取替の問題として、その取替機構や、独占利潤の源泉の問題などの、静態的な